EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.54
2010
（平成22年）
3－4

江戸東京博物館友の会会報

目次

楽しもう　友の会創立10周年記念事業！ ……1～2
［古文書講座］22年度講座の概要 ……3
江戸博クリップ「はじめまして」……3
友の会セミナー「幇間の世界とその芸」……4
友の会セミナー「江戸の食文化」……5
見学会「江戸博常設展を見る」……6
えど友サークルだより ……7
「第2回えど友研究発表会」予告/会議・会合日誌 ……7
えど友プラザ「杉並の石仏」……8
「衾の新春迎え」……8
「古文書入門」……9
落語で江戸散歩…⑬［中村仲蔵］……10
催事案内 ……11～12
会員優待のお知らせ ……12

楽しもう　友の会創立10周年記念事業！

「古文書フェスティバル」「記念グッズの配布」「船による東京の川めぐり」
「特別版・友の会観覧会」「会員が選ぶ東京新百景」「特別版・友の会セミナー」

江戸東京博物館友の会会長　松原　良

本年は友の会創立10周年にあたります。その10周年を記念して、できるだけ多くの皆さんにご参加いただけるよう多種多様な「10周年記念事業」を展開しようと、役員、部会員を中心に昨年来検討を重ねてまいりました。このたびほぼその概要がまとまりましたので、以下そのあらましをご紹介いたします。どうかご期待いただくとともに「会員自らが参加し創造していく会」となりますよう、皆さま方の積極的なご参加をお待ちいたします。

なお、これらはいずれも予定の段階であり、詳細をすべて詰めているわけではありません。したがって、タイトルや条件などもまだ変更する場合も出てきます。しかし、10周年記念事業は今年1年かけて友の会の総力を結集して行い、会員の皆さんにも大いに楽しんでいただこうとするものですので、早めに概要をご紹介することにしました。皆さんの心づもりやご予定を立てる参考にしていただけたら幸いです。

◆第1弾！
古文書フェスティバル

古文書講座は参加者も多くご好評をいただいておりますが、記念事業として現在受講中の方はもちろん古文書講座を受講したことのない皆さんにも対象を広げて「古文書のお祭り」をやろうとするものです。

例えば、①古文書解読の意義と解読についての基礎　②今までに勉強した古文書についての話題　③古文書をめぐる最近の話題やテーマ、などを、現在講座を担当していただいている3講師に初心者が興味を呼ぶように平易にお話いただく「特別講演会」を検討中です。さらにこのほか「文政町方書上翻刻プロジェクト」の皆さんに翻刻の苦労話や裏話を披露してもらうことも考えています。開催日は未定ですが、8月ごろ江戸博1階ホールで実施、参加費は無料とする予定です。

◆第2弾！
記念グッズの配布

10周年記念事業の展開に当っては記念行事に参加される皆さんへのサービスとともに、参加できない方を含めた全会員を対象とした事業も検討しました。その結果、えど友オリジナルの記念グッズを全会員に無料配布することになりました。記念グッズとしては風呂敷とバッグが内定しており、現在

デザインや色などの詳細を詰めているところです。セミナーや見学会などでもご活用いただければと思います。配布時期としては８月末ごろを予定しています。

◆第３弾！

船による東京の川めぐり

平成19年９月に実施してご好評をいただいた「川面から見る江戸東京」（船による東京の川めぐり）を今回記念事業として再び行います。

およそのコースは和泉橋から神田川を下り、柳橋から隅田川へ、そして小名木川へ入り扇橋こう門で運河の体験をした後、再び隅田川を経て日本橋川を遡上、三崎橋を経て神田川にもどり、和泉橋に帰るものです。

船の上から見る東京は普段見慣れている風景とは一味も二味も違うもので、体験された皆さんは口々にその感動を語っておられます。船の手配、運航やガイドについては「神田川船の会」の方々にお世話いただくことになっています。

開催日は潮まわりの関係などもあり、すでに９月４日(土)の午前・午後と決まっております。参加費についても友の会の方から補助を行い、格安料金でご参加いただけるようにしたいと考えています。

◆第４弾！

特別版・友の会観覧会

友の会会員を対象とした「友の会特別観覧会」は特別展ごとに毎回開催し多くの会員の皆さんにご参加いただいていますが、平成22年度の特別展の中から会員の関心が最も高そうなテーマを選んで参加費無料の特別観覧会を開催いたします。江戸博からのお勧めもあり、９月下旬から開催の特別展「隅田川―江戸が愛した風景―」(仮称)に合わせて特別版の特別観覧会を開催する予定です。

◆第５弾！

会員が選ぶ東京新百景

広重の「江戸百景」はいうに及ばず私たち日本人は「百○○」や「○○百景」が好きです。そこで私たち会員が新しく「東京百景」を選ぼうというのがこの企画です。

比較的最近では、昭和57(1982)年に「都民の日」制定30周年を記念して東京都が「新東京百景」を選定しています。このとき選定された百景を絵にしたものが昭和62(1987)年に庭園美術館で絵画展として展示されました。そんなこともあって、すでに使われている「新東京百景」という言葉を避けて私たちは「東京新百景」ということにしました。

「新百景」の選び方もいろいろと考えられますが、何か形のあるものをということで会員の皆さんから新百景となる「写真」を公募することになりました。

詳しい応募規定などは本号に同封されるチラシをご覧いただきたいのですが、おおまかなコンセプトは、“いつまでも残しておきたい風景、風物詩”および“写真を見た人が訪ねたくなる場所、景観”です。ここでいう“新”とは、古いもの、新しいものを問わず、江戸博友の会の創立10周年にあたり新たに東京百景を決めるとご理解いただきたいと思います。こういう趣旨ですので、写真撮影技術の巧拙を競うものではありません。どうか多くの会員の皆さんが気軽に応募されることを期待します。

まずは３月に皆さんからの公募を始めますが、次の段階では応募作品の審査にできるだけ多くの会員に参加していただくよう計画しています。その具体的な時期や方法は順次お知らせしていきますが、何しろ「友の会会員が選ぶ東京新百景」ですから、この審査にも多くの会員の皆さんが参加されますよう期待しています。

この会員による審査で入選作品およそ100点を決め、「東京新百景」とします。その中から二次審査委員会により入賞作品およそ10点を決める予定です。そして全入選作品を額に入れて展示する展示会を11月ごろに開催する予定です。さらに予算が許せばですが、この展示会の図録の発行なども検討中です。

以上この企画はいろいろな形で皆さんに気軽に参加していただけるものと思いますので、どうか奮ってご参加ください。

◆第６弾！

特別版・友の会セミナー

友の会セミナーが最初に開催されたのは平成13年７月27日のことで、テーマは「大山詣での今昔」、講師は当時江戸博学芸員の鈴木章生さんでした。参加者数は69名と記録にあります。友の会の設立総会が開かれたのが平成13年５月ですから、設立間もない時期に第１回のセミナーが開催されていたことになります。私もこのセミナーを受講していて、落語「大山詣り」との関係など大変興味深く聞いた記憶があります。

友の会セミナーは、当初は年５回ほどの開催でしたが、平成16年度からはほぼ毎月のように開催されるようになり、回を重ねて今年12月には第100回を迎えます。

そこで、その100回記念を兼ねた10周年記念事業として、参加費無料の特別版の友の会セミナーを開催することにしました。開催日は12月25日(土)、会場は江戸博１階ホールと決まっております。講師にはNHK大河ドラマの時代考証などでおなじみの東京学芸大学教授・大石学先生をお願いしています。テーマは「徳川八代将軍吉宗と尾張徳川家七代当主宗春の対立」の予定です。きっと素晴らしいご講演が聞けるものと思います。多数の会員の皆さんのご来場をお待ちしています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上「10周年記念事業」の概要をご紹介しました。最初にお断りしたようにすべてが詳細まで決まっているわけではありませんが、多くの会員の皆さんに全体の計画・流れをご理解いただき、積極的にご参加いただくことを期待しております。

[古文書講座] 22年度講座の概要

ご好評をいただいている古文書講座ですが、3人の先生に5月開講の22年度講座の概要についてお書きいただきましたので、ご紹介します。多数の皆さんのご参加をお待ちしています(申込方法などは11ページ)。

◆入門編（担当：小松賢司講師）

本講座は、これまで全く古文書を読んだことのない方を主な対象としています。簡単な崩し字の古文書を読みながら、辞書の引き方や、基本的な字の読み方・崩れ方など、古文書を読むために最低限必要な基礎知識について解説していきます。1期分（計3回分）の講座を通じて、まったく初めて古文書に触れた方が、辞書を片手に簡単な古文書を読むことができるようになることを目標としています。

古文書がすでに読める方でも、基礎から勉強しなおしたい方には受講をお勧めします。受講資格の制限などはありません。ただし、講座のスピードや内容は初めての方を基準にさせていただきます。史料は毎回新たなものを用いますが、解説は1期ごとに同じものが繰り返されることになりますので、予めご了承ください。

○使用史料：『旧幕引継書』(主に『市中取締類集』『撰要類集』)

○史料の内容：江戸の町に関する史料を中心に取り上げます。そのため、江戸の町に関する基礎知識についても適宜解説していきます。

◆初級編（担当：田中潤講師）

昨年度までの初級編と同じように、都市「江戸」を中心とした史料を取り上げ受講者の方々と読み進めていこうと思います。今日でも接することができる、受講者の方々に身近な内容の史料を中心に進めていく予定です。

○受講対象：基本的なくずし字が読める方。

○講座の進め方：最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行います。使用史料は事前に一期分（計三回分）を一括して配布し、受講者の方々が受講以前に目を通していただいた上で進めていきたいと思います。

○使用史料：『旧幕引継書』を基本史料として、その他の関連する史料も適宜取り上げます。

◆中級編（担当：長坂良宏講師）

○受講対象：古文書の基本的な読み方がわかり、ある程度くずし字が読める方。

○講座の進め方：最初に史料を素読し、適宜くずし字の解説を行います。その後、史料内容についての解説を行っていきます。使用史料は事前に一期分（計3回分）を一括して配布し、受講者の方々がご家庭で予習されてくることを前提に進めていきたいと思います。

○使用史料：江戸町奉行所の史料を中心とした『旧幕引継書』を基本史料として、関連史料も適宜取り入れていきたいと考えています。またその史料に関係ある史料やより理解を深めるのに必要な史料なども多く取り上げます。

○史料の内容：基本的には巨大都市江戸に関する史料を取り上げます。昨年度は、髪結、火消人足、武鑑出版など、江戸とかかわりの深い史料について取り上げてきました。今年度も同様に江戸特有の史料を読んでいきたいと思います。受講者の方々のご要望あるいは諸般の事情などによっては変更もございますが、その点はご了承いただければと思います。

江戸博クリップ

「はじめまして」

学芸員　岡塚章子

早いもので江戸博に勤務するようになってからこの4月で2年、大きな建物と空間にもようやく慣れたところです。

実は私の最初の職場は写真美術館で、その後庭園美術館を経て現在に至ります。当然のことですが同じ財団内であってもそれぞれの館は全く異なり、特に建物（施設）の違いは大きいです。

恵比寿ガーデンプレイス内にある写真美術館は、地下1階、地上4階建てのビルで、美術館というよりオフィスビルのようです。旧朝香宮邸をそのまま利用した白金にある庭園美術館は、広大な庭を持つ豪華な一軒家という感じ。そして江戸博は巨大な体育館といったところでしょうか。写真美術館にいた時は「特徴のないビルみたいな建物は美術館らしくないし、つまらない。特色のある建物がうらやましい」と思い、庭園美術館では「建物は立派だけど冬は寒いし、古い建物はやっぱり使い勝手が悪いな」と思っていました。そして江戸東京博物館。著名な建築家の設計による建物は非常にユニークで面白い部分もあるのですが、あまりに大きいため、異動してきた当初は目的地にたどり着けないばかりか自分の居場所もわからなくなることもあり、江戸博の人に「携帯電話を持って移動したほうがいい」とアドバイスを受けました。幸いなことに、まだ携帯で助けを求めたことはありませんが……。

というわけで、「建築家が手がけた博物館」で働く楽しさ？を実感しております。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

第87回　江戸東京博物館友の会セミナー（2009/11/28）

「幇間の世界とその芸」

講師　桜川米七さん（幇間）

米七さんは数少ない幇間（ほうかん・たいこもち）のお一人で、この日の助手・女性の七太郎さんを含め、4名のお弟子さんの師匠でもあります。粋な伝統芸能に触れようと、立ち見も出るほど熱気溢れる中でのセミナー開始となりました。

幇間の由来

幇間とは、酒間幇助業の意味で、太閤さまのごきげんとり、三味線・鉦（かね）・太鼓の太鼓持ち、太鼓の先生の太鼓持ちなど諸説があり、呼称はほかに太夫衆、男芸者、たぬき（三味線を持つ芸者はネコ）、よいしょ、末社(客は本社)等あります。

1780年頃桜川慈悲成が出て、桜川は幇間の代名詞になりました。明治に松廼家露八、昭和の初めには吉原に名人・桜川忠七がおり、その弟子が米七さんの師匠の悠玄亭玉介です。芸人は常にきれいでなくてはと、毎日床屋に行っていました。元々声色（こわいろ）の流しで、常磐津・三味線もやったあと噺家（はなしか）になり、その後幇間になった人です。芸も踊りもうまく、特に踊りは坂東流の名取でもありました。

仕事はお座敷のプロデュースで、場面を見て、何か芸をやります。唄・踊り・珍芸・あて振り・おしゃべり等あります（途中、珍芸「百面相」で恵比寿様と大黒様を見せていただき、会場もなごやかな笑いと拍手に包まれました）。

顔を伏せ、お辞儀して始まる寄席・高座の芸人、噺家に対し、幇間はお座敷の芸人で、場面を見極めるため顔を上げて入室します。芸の内容は似ており、幇間から噺家になる人は多く、噺家から幇間は米七さんだけです。

修行は、入門して5年間奉公し、1年間お礼奉公をします。所作・作法はお酌のとき、基本的に両手でやります。上座へは「高上がりします」と言って行くなどありますが、概ね一般の社会と変わりません。

衣装は着物と羽織を必ず着ます。羽織は自家の紋ではなく、拵（こしら）えてくれた客の家の紋をつけます。前もってお客がわからないときは表と裏の紋が異なるリバーシブルを羽織ります。履き物は草履で、雨のときは下駄、白い鼻緒が良しとされます。これは色気とかはないという意味で、頭も本来は坊主頭でした。

嘘のヨイショは使わない幇間

いやなお客もいますが芸人は逃げるわけにはいきません。そのため好きになろうと努めます。人間はどこか、いいところがあり、そのお客の長所をほめ、嘘のヨイショは使いません。また、少額でも、金ばなれのいい客が粋な客です。玉介師匠から粋はスイで、水はどんな器でもうまく入り込む、どんな場面でも対応できる、これが粋だと教わりました。

花柳界には置き屋、料理屋、待合の三業があります。今は料理屋と待合が一緒になって料亭といいます。ここに見番（けんばん）が入っており、連絡をとります。見番には箱屋があり箱とは三味線のことで、芸者の三味線持ちや着物の着付けもやります。浅草には戦前からあった旧見番、戦後できた新見番があります。旧見番は芸者の純粋な芸道で、両方とも千人位いた時代もありました。

用語の玉代は花代ともいいます。お出先とは待合・料亭のこと。看板とは置き屋の屋号、約束とはいつ何時から何時までと決まっている予約をいいます。いつ、どこへと記入する紙があい状で、見番からもらいます。(実際に本物のあい状を示し、記念にと4名に進呈、この皆さんがあとのお座敷遊びに協力)

修行が終わった芸者を一本、見習い中で玉代が半分を半玉といいます。京都の舞妓と一緒です。日舞は必ずやり、唄・三味線・鳴り物、そのほか鼓・太鼓・笛・お花・お茶をやる芸者もおり、働いた大部分が稽古代となります。元々吉原が一番格上で、囲まれている場所のため廓の芸者、それ以外は浅草でもどこでも町場の芸者といいます。

今、花柳界は小さくなり、やっている所は東京六花街の浅草・新橋・赤坂・神楽坂等です。浅草には清元・三味線の名手の80代の芸者もいます。昔は辰巳芸者で有名な深川、そのほかに柳橋もありました。

幇間芸の実演

（一）簡単な遊びを二つ。実際のお座敷では芸者の三味線が付きますが、今回は会場のため師匠の口三味線が付きました。4名登壇してもらい、最初の2名が糸巻き競争（おちょこを割り箸（ばし）に糸でくくりつけ、糸の長さを同じにして巻き上げる。早く終わった方が勝ち）。次の2名が碁石運び競争（塗り箸で数個の碁石を横に置いてある皿に移す）でした。

（二）1曲目は、妙見さん参りの18歳の娘さん、後半は百歳を見事に踊り分けられました。2曲目のうたいながら踊る「名古屋甚句」との合間には、実は歌詞が一言だけという3曲を会場の手拍子と笑いのうちにうたわれました。3曲目は七太郎さんと二人で軽やかな「やっこさん」、4曲目の「深川」も息の合った師弟の踊りでした。

（三）出し物は「太鼓腹」で、屏風（びょうぶ）の陰で見え隠れしながらやりとりする屏風芸は一人二役の大奮闘でした。

（四）「隣の空き地に…」という小話なども笑いを誘いました。

（五）皆さまのご健勝をお祈りいたしましてと師弟の、宝の入り船「かっぽれ」の踊りで、セミナーの幕を拍手喝采のうちにめでたく閉じました。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤幸彦

第88回 江戸東京博物館友の会セミナー（2009・12・26）

「江戸の食文化」

講師　小沢詠美子さん（成城大学非常勤講師）

友の会の皆さんは、江戸の食文化のおおよその実情はご承知でしょうから、ここでは普通はやらない少々変化球的な内容で進めたいと思います。

江戸の市場と食材

江戸時代の江戸では食文化が大変な発展をしました。具体的には食材と料理方法がそれまでよりも豊富になったこと、料理に基づくさまざまな文化が展開してくるようになったことなどです。食材が豊富になった様子を、市場の広がり具合で見てみましょう。

江戸には、魚と野菜・水菓子の市場が10カ所以上あって、江戸の人々の食生活に対応していました。

魚市場では、日本橋近くに日本橋魚市場、新肴場魚市場、四日市魚市場があり、少し離れて京橋魚市場、さらに芝雑魚場魚市場がありました。青果市場では、千住青果市場、神田青果市場、駒込青果市場、そして品川青果市場がありました。

魚は江戸湾、三浦半島、房総半島の各地から入ってきました。幕府は、江戸時代初期の頃、江戸にやってきた摂津の漁師らに、幕府への魚介類献上などを条件に、漁業権や市場開設を認めていきます。

一方、野菜の生産は、江戸に近い地域では葉ものなど痛みやすいもの、遠隔地では根菜類などの日持ちのするもの、というように分けられ、それぞれ青物問屋を通して流通させていました。しかし、のちには渋谷・目黒・千駄ヶ谷周辺の農民が、問屋を通さない青物の直売を登場させます。こうしてますます、江戸の食材市場は拡大していったのです。

外食産業の発展

江戸中期には、行動文化とも言うべき江戸の名所旧跡見物などの物見遊山が流行し、このことが食材の豊富さともあいまって、外食産業の発展を促しました。そば・うどん、にぎり寿司、天ぷら、甘酒、ところてん、冷水、砂糖水など、さまざまな屋台が人気を博しました。特にそば屋台は、夜間外出の難しかった当時にあって夜鳴きそばを売り歩き、人々から「重宝した」と歓迎されていました。

固定店舗を構えた各種飲食店、高級な料亭なども急速に広がっていきました。しかも、料亭は単に食事をするだけの場ではなく、書画展示会、咄（はなし）の会など、文人たちの活動を支える場にもなっていました。ちょうど、今日のホテルに似た機能といえるでしょう。

江戸の食情報と出版

江戸時代は料理の種類、食材、料理レシピ、料理店など「食」に関する情報も大量に出回りました。

例えば相撲の番付表になぞらえて「うまいもの番付」と言うのが一種の読み物として人々の間に流れ、話題になっていました。天保11(1840)年の『包丁里山海見立角力』によると、魚のうまいものは大関がタイ、関脇がハモ、小結がカツオで、以下前頭としてマス、アユ、イセエビ、シラウオなどが続いています。

野菜は大関がシイタケ、関脇がダイコン、小結がスイゼンジノリで、前頭にナガイモ、ウド、ナメタケ、サトイモ、シメジ、マツタケなどが並んでいます。ここで面白いのは、マツタケよりシイタケがずっと上のトップにあることです。食べものの人気や嗜好性は時代によって変わっていくものであることを教えられます。

また、『豆腐百珍』という本もありました。ありとあらゆる豆腐料理を紹介したものですが、歯が弱った人々の食生活と健康を支えるのに、豆腐料理は貴重だったのでしょう。大いに頼りにされたようです。

そして『江戸流行料理通』がベストセラーになり、続けて4編出ています。レシピを含めて各種料理を紹介している内容ですが、現代の専門家は「見るべきものはない」との評。当時の有名人、人気の文人を総動員して挿絵や本文に登場させたので売れまくったのかもしれません。

一方、我が国最古の料理本『料理物語』が出版されたのは慶安2(1649)年のこと。その中に「獣の部」という項目があって、ここにはシカ、タヌキ、イノシシ、ウサギ、カワウソ、クマ、イヌという各種動物の肉が、汁、いり焼き、でんがく、山椒味噌などの調理法で紹介されています。日本人は明治維新以降に肉を食べ始めた、と理解されていますが、350年前にすでにいろいろな肉を食べていたと読めるのです。

このように、江戸における食生活は、食材や調理法が豊かになったのみならず、さまざまな文化的発展が見られます。魚や野菜などの食材を提供する市場が栄え、日本橋魚市場の商人たちは、江戸ッ子の代表的な存在となり、屋台や料理店などの外食産業も、江戸になくてはならないものに成長しました。そして、多種多様な料理本も出版されるなど、江戸の食文化の完成度の高さにあらためて驚くのです。

【記録】文：広報部会・鈴木進一
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会　見学会（2010/1/26,28）

「江戸博常設展を見る」

今回の見学会の趣旨

最近友の会に入会された方々を対象に江戸博の５・６階に設けられている常設展示室を、もっと知ってその楽しさを味わっていただくことを目的に開催されました。

なお、今回は密度の濃い解説ということで、少人数での開催となり１月26(火)、28日(木) ２回の実施となりました。解説は会員でボランティアガイドもなさっている方を中心にお願いしました。企画展は「旗本が見た忠臣蔵～若狭野浅野家三千石の軌跡～」「将軍綱吉と元禄の世～泰平のなかの転換～」でした。

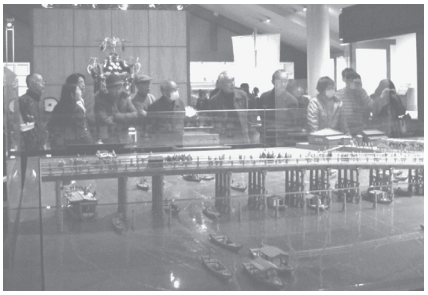
集合は江戸博1階ホール前

参加者は点呼を済ませ、エレベーターで６階の展示室へ向かいます。出発は江戸時代よろしく五街道の起点日本橋からです。参加された多くの方々は常設展示を見学した経験をお持ちでしたが、説明を受けながらの見学は初めてという方もあり興味深く熱心に見学していました。

順路は時代を追って江戸から東京へ

まず、江戸時代初期の地図で町人地、寺社地にくらべ武家地の広さに見入り、大名かごでは見学中の小学生が「かご」に試乗し「せまいなあ」と声を上げていました。そこで、江戸時代の人々の身長は男性で平均150cmとの説明に納得しました。

そして、大名屋敷には①御成門、②大広間、③能舞台を備える必要があったとの説明に広大な屋敷に見入りました。また、企画展の将軍綱吉の自筆書や画を見て、元禄時代の華やかな文化、治世の説明を受けました。



▲両国橋西詰

５階に降り、「町のしくみ」の中で江戸時代に神田上水や玉川上水から、木樋で井戸に水道が引かれていたことを改めて知りました。町の構成は商店の並ぶ大通り、路地を入ると棟割長屋、居職（いじょく）の職人の様子や江戸には水売りがあり、酒と同じぐらいの値段であったなどの、町人の生活の説明を受け、一石橋の「迷子標」、本石町の「時の鐘」で時刻を知ったことを学びました。

▲菱垣回船

そして、「絵草紙屋」、「三井越後屋江戸店」。横から見ると店員の名前が書いてあるビラなど見過ごしてしまいそうな細部まで見ました。天下の台所・大坂と大消費都市・江戸を結ぶ「菱垣回船」を見たあと、「盛り場の様相」で「両国橋西詰」、明暦の大火後の火除け地の「見世物小屋」、「大道芸」のにぎわい、橋上の行きかう人、猪牙舟の有様等々当時のにぎわいが伝わってきそうです。

▲中村座前で

中村座の内部を見る

「芝居小屋」の「中村座」では「内部見学」がしたいという会員の声があり「内部見学」となりました。歌川豊国画「芝居小屋内部の図（安政５(1858)年)」を見たり、歌舞伎の楽器に触れたり、舟の櫓（ろ）の音を出す道具を興味深く見学しました。

明治から昭和へ

時代は明治・大正・昭和へと移行し鹿鳴館、朝野新聞社、レンガ街、銀座の建物、ガス灯の点灯夫の存在など、また、戦時中の風船爆弾の大きさに驚き、東京空襲焼失区域地図であらためて戦争の惨状に心が痛み、当時のゴミ箱や家の様子まで知りました。その後、よみがえる東京で現代にたどり着きました。

▲風船爆弾

▲東京空襲焼失区域地図

江戸から東京まで時代を追っての、解説の方の丁寧な説明に聞き入り、２時間の見学は無事終了しました。「説明を聞きながらの見学はより一層興味と関心がわいてきました」との会員の方の声も聞かれ、常設展示室の一層の良さを知っていただいたのではないかと思われます。

【記録】文：広報部会・今野君江
写真：同・原盛年

サークルだより

◎活動概況

◆**落語と講談を楽しむ会**：12月16日(水)月番の島田昭さんの世話でお江戸両国亭での「女流講談会・なでしこくらぶ」の公演を鑑賞した。演目は年末恒例の「赤穂義士伝」で統一され、いずれ劣らぬ熱演で、女流講談を堪能した。参加者16名。1月26日(火)月番の田中文彬さんによる4部構成で、八代目雷門助六の「人形ばなし」(映像)、作家・織田正吉氏の「落語の歴史」についての講演（同)、フランキー堺による「明治の特異な芸人・一柳斎柳一」(テープ)、三代目古今亭志ん朝の「宿屋の富」(映像）を鑑賞した。一同珍しい映像やテープに感嘆しきりだった。参加者17名。

◆**藩史研究会**：12月11日(金)市川勝さんと仲間の皆さんが駿府城、方広寺、大阪城、大和小泉などの片桐且元関連の地を訪れて資料を収集した結果を「片桐且元・貞隆兄弟と茨木藩・龍田藩・大和小泉藩の歴史」と題して発表した。参加者28名。1月8日(金)上野国七日市(群馬県富岡市）に藩庁を置いた七日市藩について、後藤幸子さんが関連事項を含め中身の濃い研究発表を行った。参加者は28名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：12月10日(木)、1月14日(木)に例会を開催。参加者は各9、10名。

◆**神田川を歩き楽しむ会**：12月23日(水・祝)、24日(木)に第2回として、井の頭線「三鷹台」駅から神田橋へ出て佃橋まで神田川に沿って歩いた。途中、久我山稲荷神社、玉川上水、吉祥院（高井戸不動)、高井戸の栗林に寄り参拝あるいは見学を行った。参加者は各42、40名。1月28日(木)、31日(日)に第3回として、井の頭線「高井戸」駅から佃橋へ出て永福橋まで神田川に沿って歩いた。途中、三泉渕公園（山野草万葉植物園)、塚山公園、柏の宮公園、下高井戸八幡神社、万葉植物園(向陽中）に寄り見学あるいは参拝を行った。参加者は各40名、43名。

❖　❖　❖　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

「第2回えど友研究発表会」発表者募集の予告

昨年8月、友の会の新しい事業として「えど友研究発表会」の第1回目を実施いたしました。おかげさまで会場が満席となるほどの盛況で、内容的にはどれも興味深く、大変好評でした。

そこで、今年も引き続き第2回目の発表会を計画いたしております。発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料等のお支払いはありません。

正式な募集および応募方法については、次号「えど友」で改めて発表いたしますが、今のところ開催は、8月上旬に江戸博1階学習室または会議室、発表は2～3テーマとし1テーマにつき質疑応答を含め1時間程度を予定しております。

つきましては、日頃の研究・調査の成果を発表してみようとお考えの会員のみなさんは、発表に向けてご準備いただき、**次号「えど友」の募集記事に従い、奮ってご応募ください。**

会議・会合日誌

2009／12～2010／1

◆**役員会**

12月10日(木)17時開催。三部会合同会議の進め方、10周年記念事業計画の中間報告を確認した。出席者12名。1月14日(木)14時開催。10周年記念事業計画の中間報告、「友の会規約」見直し案を引き続き検討。出席者12名。

◆**事業部会**

12月3日(木)17時開催。11月の事業報告、古文書講座の申込状況を確認し、今後の事業計画を決定。11月行事は立見がでる程の大盛況。出席者17名。1月7日(木)17時開催。12月の事業報告と今後の事業計画を確認。2010年は企画事業が多くなる。出席者20名。

◆**広報部会**

12月18日(金)14時開催。『えど友』54号の方針の確認、10周年記念事業担当作業について議論。出席者17名。1月22日(金)14時開催。『えど友』54号の入稿スケジュール、記念事業担当分の具体的作業を確認。出席者12名。

◆**総務部会**

12月25日(金)13時開催。『えど友』53号の発送業務、次号の日程確認、記念事業提案に関し確認。出席者19名。1月27日(水)15時開催。記念事業担当作業、三部合同会議の内容、今後の日程確認等を行った。出席者16名。

◆**三部会合同会議**

1月14日(木)16時開催。新人も含め各人の自己紹介。各部の活動等を紹介後、10周年記念事業計画の具体案を共有し、協力事項を確認。出席者28名。

◆**文政町方書上翻刻 プロジェクト**

12月3日(木)、17日(木)、1月7日(木)、21日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各9名、8名、8名、8名、(B)各9名、9名、10名、9名。

えど友プラザ

友の会
会員の投稿欄

杉並の石仏

笹　川　道　央

区の学習講座で、グループを組んで杉並の石仏を調べました。

杉並区には湧水池を水源にした神田川・善福寺川・妙正寺川などが流れています。現在は都市化によって水量がほとんどなくなっていますが、江戸時代には湧水が豊富で、今日では想像もつかない量の水が各川をとうとうと流れていました。

これらの川沿いには田や畑が広がり、2〜30戸ほどの農家がそれぞれコミュニティーを作って住んでいたようです。

その人達が講を組み、彼等の費用で、彼等の為に造立した石仏が、現在も杉並区内に400体近くも残っています。路傍や大木の陰に建てられたそれら石仏の多くは、その後の宅地化や道路の拡幅のために、近くのお寺や神社の境内に移されています。

石仏には「名を刻んだ17人が講を組んで、念仏供養のためにこれを建てた」とか、「26名が念仏講を組んで、毎日の食事から少しずつ削った稗や粟を願主宅に持ち寄ってお金に換え6年かけて建てた」などの記録があり、造立当時の様子がうかがえます。

次に石仏の形を見ますと、地蔵菩薩像が50％以上、庚申塔としての青面金剛像が20％以上、この2つで全体の3/4を占めて圧倒的です。残りは観音像・如来像・不動明王などとなっています。

▲杉並・観泉寺の六地蔵と七観音像

この圧倒的な数の地蔵菩薩と青面金剛に刻まれた、造立の年月を時系列にプロットしますと、それまで存在しなかったこれら民間信仰の石仏が、寛文の中頃に突然として現れ、急速に増えています。更に、青面金剛は半世紀ほどの年月が経つと数が減り、その後はほとんど作られていません。また、地蔵菩薩も減少のカーブこそなだらかですが、やはり1世紀ほど経つと減少しています。このように石仏の消長については、一つの傾向が出ています。

その要因については、根底に信仰心の問題はありますが、急に増えた背景には17世紀の中頃になり世の中も落着き、農耕技術の進歩によって生産性が向上し、更に年貢率の緩和などもあって、農家の手元に経済的なゆとりができたのでしょう。また、この辺りの地層からは石仏を作る適当な石は得られません。従って江戸城下町の造成工事が一段落した寛永年間以降に石材が余って、石仏を作る石が農家の手にも入り易い状況になったことがこの時期に急増した一因かもしれません。

一方、1世紀たらずの間に、造立の数が減っている点については、コミュニティー内で必要な数の石像が、全体に行き渡ったという単純なことなのでしょうか、それとも石仏を巡る農民の生活に、何らかの変化や強制があったのでしょうか、興味のあるところです。

衾（ふすま）の新春（はる）迎え

栗　山　佳　也

私の父母の子供の時の話である。

「年の暮れ、衾の鎮守氷川神社や檀那寺常円寺、碑文谷円融寺にカツノキ（ヌルデ）の小さな板を持って行き、お呪（まじな）いを書いてもらって家に帰り、大戸の鴨居に打ち付けたり、字（あざ）の入り口にある道祖神から道を渡して縄を張り、中央にぶら下げた。また、肌身

▲富士吉田郷土資料館で見た道切札

につけてお守りにしたり、孕（はら）み箸（手元を孕んだお腹のように膨らませた箸）に作って、お正月の祝い膳に添えた」という。そして、その話を聞いて間もなく父母が亡くなってしまった。亡くなってしばらくし、カツノキがどんな木だかが知りたくなり、あっちこっち旅の行く先で聞いて歩くことになった。

そのカツノキがヌルデと分かったのが岐阜県岩村郷土資料館であり、縄を張って中央に吊るす光景は昭和の末『信濃毎日新聞』の写真で見た。しかし、その札の現物は見たことがなかった。ところが、平成21年10月30日、山梨県富士吉田郷土資料館で見て驚いた。許可をもらい撮影したのが上記の写真である。

衾とは現在私が住んでいる所であり、生まれた所でもある。その場所とは、現目黒区の環状7号線以西全域をいい、現目黒区の3分の1、面積は5.2ha余りである。標高は高い衾町公園で44m余り、低い目黒区緑ヶ丘3丁目と世田谷区奥沢境の呑川地域で20m余りであり、周囲を赤土の崖で囲まれ、品川道に挟まれたふたつの「盆地状低地」と『目黒区史』に記されている。

大雑把に言えば、東急東横線の自由が丘駅、都立大学駅、東急大井町線緑ヶ丘駅、大岡山駅に囲まれた地域であり、江戸時代と変わっていない。

そして、衾の地名は『角川日本地名大事典』によると、〔近世〕江戸時代から明治22(1889)年の村名。〔近代〕

▲ヌルデ（カツノキ）

明治22年から昭和7(1932)年の大字名、昭和7年から昭和39(1964)年の町名で、八雲1丁目から5丁目までをいった。

【参考文献】

『守貞謾稿図版集成』(高橋雅夫著、雄山閣、2002年刊)

『江戸事情　第1巻生活編』(樋口清之監修、雄山閣、1991年刊)

古文書入門

中　村　貞　子

旅をしたとき、また都内で散歩などのとき神社仏閣、名所旧跡をたどると、よく句碑、歌碑や扁額などがある。これらを見るにつけなんと読むのかなー、読めれば楽しいだろうなーと歯がゆい思いをしていた。友の会に入会して一年ほど過ぎた頃、会員のために古文書の講座があるのを知り、それまで特に友の会の行事に参加したことはなかったのだが、これだ！と申込んだ。とりあえず、辞書は必要だろうと講師の先生が勧めてくれた辞書を2冊購入し、準備はできたものの、第1期の3回の講座は1度お休みしたりしたためにほとんど理解できないまま終わったような気がする。しかも月1回なので、あいだに復習をしないと次はほとんど忘れていて、聞いているうちにああ、そうだったということになる。この繰り返しで、結局いま古文書入門講座を3年続けている。資料は『旧幕引継書』のあれこれを先生が選んでくださって、継続している生徒たちも飽きないように工夫が凝らされている。くずし字がだんだん読めるようになってくるのも楽しいが、なにより、文書に書かれている事案の背景や江戸の状況などのお話がおもしろくてやめられなくなってしまった。

2期目の講座を受け始めた頃、友人から「じゃあ、これを読んでみて」といわれて渡されたのは慶応元(1865)年に書かれた友人の家の由緒書である。

寛永から明治まで、津和野藩亀井家三代当主茲政(これまさ)公から十二代当主茲監(これみ)公の御側近くに仕えた、彼の家の初代から八代目までの由緒が書かれている。

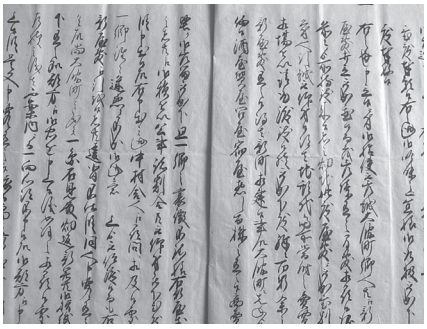
枚数にして70枚ほど、文字数はどれほどだろうか。講座で読む『旧幕引継書』はいってみれば、答えがある。わからなければ先生に聞けばよい。答えのないものを読み解いていくのはまるで、パズルのようであった。

内容は誰が誰に仕えて、どんな役職で、どんな功績があったとか、殿様から拝領した物の中味の説明であったり、また、殿様の御供で江戸を筆頭にあちらこちらに行ったとかいう記述が続く。慣れてくるとだいたい同じパターンなので、読み進むスピードが早くなるが、最初は読めない字にひっかかり、たった1行読むのにも1時間近くかかったりした。

まず偏や旁がなんなのかという想像がつかないので、『用例辞典』をひくことができない。『くずし字解読辞典』のお世話になるしかない。『解読辞典』で文字をみつけるまでは文字の書き出しの点や、縦棒、横棒を頼りに探すのでえらく時間がかかるが、その分みつけたときのうれしさはなんともいえない。「やった！」という感じである。

役職名などは知識がないとわからないので広辞苑をひいて確認したりと、最初の1ページをある程度読めるようになるまで何日かかったことかしれない。しかし、入門講座を続けているうちに、だんだん読み解いていくコツのようなものがわかってくる。

そうなると、ページの進む速度もだいぶアップし、結局2年近くかかってこの由緒書をともかく最後まで読むこ


▲中村家の古文書

とができた。今考えると、この答えのないものを辞書と首っ引きで読んだことはとてもよい勉強になっていたといえる。

だがあちらこちらまだ穴があいているし、意味の分からない言葉はあるしで、読み下し文を書くまでにはいたっていない。

とりあえず、文書通りに解読したものを友人には渡したけれど、自分でも3年目の今、初心に帰ってもういちど見直してみようかと思っているところである。

今は、我が家の古いタンスの中からひっぱりだした「覚」というタイトルの古文書を読んでいる。最近はさすがに『解読辞典』よりも『用例辞典』をひく方が多くなってきたので、読むスピードはアップしている。中村家の古文書もある程度文字は解読できたのだが、いつの時代なのか、先祖がどういう役どころなのかはよくわからない。しかも、いまだに名所旧跡の句碑にであっても、読める字を見つける方がまれである。これはたぶんずーっと、この調子？？？

原稿を募集します！

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関することなどを1000字程度にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返ししません。

落語で

江戸散歩…⑬

[中村仲蔵]

法恩寺橋、建設中のスカイツリーも見える

この噺（はなし）は、歌舞伎役者の初代　中村仲蔵の芸道精進談です。今回は仲蔵が日ごろ信仰し、願掛けのために歩いたに違いない道筋－自宅のあった住吉町、今の人形町から柳島の妙見さま－を歩いてみます。しかし、幕府開闢（かいびゃく）以来、平成の現在まで普請と作事を重ねるこの街のこと、この噺の頃をしのばせるものなど期待も出来ないのですが……。

住吉町

当時、芝居小屋の中村座は堺町に、市村座は葺屋町にありましたので（江戸三座のもう一つ森田座は、現在の新橋）、仲蔵が住吉町に住んでいたというのは納得です。住吉町は、現在の日本橋人形町二丁目あたりになります。この付近の新和泉・住吉・蛎殻・松島・元大阪・芳・堺の町を合わせて、昭和8(1933)年に人形町となります。この付近には歌舞伎や繰り人形芝居の人形を作る家が多くあったため、通称の呼び名が正式な町名となったとのことです。

両国橋を目指して歩きます。この橋の西詰の様子は、江戸博の常設展示室の立体模型に再現されています。橋を渡って、下町で威容を誇るわが江戸東京博物館を左手に見て、北斎通りに出ます。

▲両国橋西詰（江戸博模型展示）

▲北斎通りから江戸博

割下水(わりげすい)

本所には南北の割下水があり、江戸っ子が普通に割下水と言えば、南割下水を指していました。この南割下水の跡が、“北斎通り”です。ここを東に進みます。

すると、北十間川と小名木川を結ぶ“大横川（今は北十間川と竪川の間は埋立てられ、大横川親水公園となっています)”に差し掛かります。

仲蔵が“妙見さま”への願掛けのお参りをして帰る道すがら、にわか雨に遭遇し、これを避けるため、“そば屋”に飛び込みます。このそば屋を正蔵師匠（八代目）は“割下水の角のそば屋”と設定しています。ですが現在、この付近にはそば屋はありません。

そんなそば屋で、そばをすすっていると、一人の旗本が飛び込んで来ます。その旗本の身装（みなり）と所作から、『仮名手本忠臣蔵』の五段目の斧定九郎役の工夫を思い付きます。

そして、その工夫で初日を演じます。しかし初日の客はその出来に驚き、ただ息をのむだけ。仲蔵はしくじったと思い修行の仕直しを上方ですることにして家を出ます。日本橋の近くにあった魚河岸の真ん中で、人の立ち話を耳にします。

「おじさあん」
「おおう」
「きのう行ったら、居なかったねえ」
「おうおう、おらぁおめえ、忠臣蔵ぁ見に行ったよ」
「おう、芝居かい。どうだい、おもしろいか？」
「おもしろいにも、おめえ、おそれいったのあ仲蔵の定九郎。おいらぁ、あの狂言みるたんびにね、５万３千石のおめえ、なぁ、家老の倅（せがれ）が山賊になるってのあ、おかしいと思ったよ。ところが仲蔵はもののみごとに、絵解きをして見せてくれたよう、え？　浪人者で演りゃあがった。水もたれそうないい定九郎だ。おらぁ初物を見たんで、七十五日（ん）生き伸びらぁ。よかったぜ」

親水公園を北に歩いて、法恩寺橋のたもとから蔵前橋通りを東に進みます。そして、横十間川に架かる天神橋を左に折れます。この川に沿って北に進むと浅草通りの柳島橋に突き当たります。この橋を渡った左手のマンションの１階部分が、“妙見さま”です。

柳島の妙見さま

“柳島の妙見さま”は通称で、その正式名は、妙見山法性寺。室町時代、北極星から妙見菩薩像が降臨したという日蓮宗の古刹で、境内には、その北辰妙見大菩薩の碑、葛飾北斎辰政翁顕彰碑、近松門左衛門碑や“昔ばなし柳塚”の碑などがあります。

▲柳島の妙見さま

そして、ここを出て西を見ると現在建設中の“東京スカイツリー”を見ることができます。

願い事があるときは、仲蔵にあやかってこの道を歩けば“満願成就”かもしれません。妙見さまの境内には、「叶えてほしい願い事　まかす心が運を呼ぶ」とありました。

【取材】歩いた人(文・写真)：
広報部会・岡田守弘
イラストを描いた人：
同・松原良

催事案内

古文書講座

新年度は５月から開講

古文書講座の新年度第１期は５月から下記日程で開講します。**申込の受付は３月末まで**です。会員の皆さまのご要望に応え、本年度から中級編についても午前午後の２講座制とし、入門編、初級編と合わせ**各編すべてが２講座制**となります。多数のみなさんのご参加をお待ちします。

◆入門編

- 講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5月12日(水)、6月2日(水)、7月　調整中
- 時間：A講座は 10：30 ～ 12：30
  P講座は 14：00 ～ 16：00

◆初級編

- 講師：田中潤さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5月19日(水)、6月16日(水)、7月　調整中
- 時間：A講座は 10：30 ～ 12：30
  P講座は 14：00 ～ 16：00

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5月15日(土)、6月19日(土)、7月　調整中
- 時間：A講座は 10：30 ～ 12：30
  P講座は 14：00 ～ 16：00

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- 参加費：各講座とも全3回 1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「龍馬伝」展

◆ NHK大河ドラマ「龍馬伝」と連動して、坂本龍馬の生涯を回顧する特別展です。坂本龍馬は天保6（1835)年、土佐に生まれ、薩長同盟の締結に尽力したり、大政奉還を画策するなど、明治維新を推し進める大きな役割を果たしました。全国各地に散在する龍馬の遺品や書簡を中心に、幕末の騒乱を伝える歴史資料を交えながら、龍馬の波乱に満ちた生涯が紹介されます。担当の市川寛明学芸員(展示事業係長)による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日時：4月30日(金)17：00 ～ 19：00
- 申込締切：4月20日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第91回「徳川家三代の婚姻政策」

講師　山本博文さん（東京大学史料編纂所教授・文学博士）

◆戦国時代、大名の間では政略結婚が一般的でした。徳川家の場合も例外ではありません。しかし家康が将軍となると、その様相が変化していきます。それまでは同盟関係を維持するための縁組だったものが、相手を懐柔するためのものとなり、さらにそうした政治的な縁組を離れ、徳川家の格式をあげるものとなっていきます。家康、秀忠、家光三代の婚姻政策の流れは、このようなものとして理解できますが、３人の個性の違いによって、それぞれの結婚生活はずいぶん異なっています。今回はそうした実態をお話していただきます。

○講師略歴：やまもと・ひろふみ
1957年岡山県津山市生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。東京大学文学博士。現在、東京大学史料編纂所教授。専攻は日本近世史。『寛永時代』（吉川弘文館)、『天下人の一級資料』（柏書房)など著書多数。

- 開催日時：3月27日(土)14：00 ～ 15：30
- 申込締切：3月18日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第92回「江戸の食べ物～作る･獲る･食べる～」

講師　田中実穂さん（江戸博学芸員）

◆大江戸百万人を支えた「食」を生み出したのは、江戸を取り囲む田や畑、そして川や海でした。明治7（1874)年に発行された『東京府志料』には、かつての東京23区内や東京湾で、バラエティ豊かな農産物や魚貝が収穫されたことが記録され、江戸東京近郊の農林水産業を知るよすがとなっています。都市を取り囲む動植物は「食材」となり、さまざまに加工されて、人々の日常生活を支えていきました。人々はどのように食べていたのか、また、食べることを楽しみにしていたのかを、当時の日記などから解説していただきます。

○講師略歴：たなか・みほ
江戸博学芸員。平成16年5月にも友の会セミナー「江戸を食する“春”―天保時代のお祝いごとの食事―」で講師を務めています。

- 開催日時：4月24日(土)14：00 ～ 15：30
- 申込締切：4月15日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

見学会

「広重『江戸百景』周辺探訪―その2(上野周辺)」

◆この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪します。探訪では広重『江戸百景』の世界にタイムスリップし、江戸の町の成立や発展、人々の生活や声などを身近に感じていただければ幸いです。江戸時代、御徒町周辺の上野山下は広小路と呼ばれる火除地で、盛り場として庶民の生き生きとしたにぎわいに満ちていました。一方、上野のお山には東叡山寛永寺を中心に約70の堂塔伽藍があり、その荘厳さに庶民は近づけない雰囲気でした。今回は、その御徒町～上野のお山～谷中を歩きます。所要時間は約3時間、東京メトロ千代田線千駄木駅前で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『下谷広小路』、『湯しま天神坂上眺望』、『上野山した』、『上野清水堂不忍ノ池』、『上野山内月の松』、『千駄木団子坂花屋敷』

- 開催日時：3月28日(日)12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：JR御徒町駅南口改札出口
- 申込締切：3月18日(木)必着
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

お申込方法

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく！**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

●特別展

「チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展」

会　期　2010年2月2日(火)～4月11日(日)
休館日　毎週月曜日、ただし3月22日(月・祝)は開館、23日(火)は休館
会　員　一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者　一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

※前号の観覧料が誤っていました。正しくは上記のとおりですので、お詫びして訂正します。

次回予告

●特別展

「龍馬伝」展

会　期　2010年4月27日(火)～6月6日(日)
休館日　5月6日(木)、24日(月)、31日(月)
会　員　一般600円、65歳以上300円、大・専門生480円
同伴者　一般960円、65歳以上480円、大・専門生760円
＊小学生・中学生は無料、高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

好評開催中！

●企画展

「えどはくでおさらい！明治・大正時代 ～教科書でみたあの人、この絵～」

会　期　2010年2月16日(火)～3月28日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●次回企画展

「ザ・脚本―放送作家の80年―(仮称)」

会　期　2010年4月6日(火)～4月18日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

「市民からのおくりもの2010 ～平成21年度収集　新収蔵品から～(仮称)」

会　期　2010年4月24日(土)～5月26日(水)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

訃報

第20回友の会セミナー「伊能家から見た伊能忠敬」で講師を務められた伊能陽子さんが、1月25日急性心不全のため75歳で逝去されました。
謹んでごめい福をお祈り申し上げます。

会報＜えど友＞第54号
平成22年3月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、島尻茂樹、内匠屋京子、笹川道央、栗山佳也、秋尾暢宏、今野君江、本田豊、鈴木進一、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910